
美少女なんてありえない

サトイモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美少女なんてありえない

【Nコード】

N8949Z

【作者名】

サトイモ

【あらすじ】

とある事情で友達も作らず、微妙に引きこもりになっていた少年、美里晶は中学卒業前に引越す事になった。

そして新居での翌日、目を覚ましたら何故か女になっていた。

アキラが男であった事を覚えているのは父と母のみで、住民票から戸籍まできつちりと女性扱いに。

男の時でもアキラLOVEだった父はおおはしゃぎで、母は冷静に女の子教育を開始。本人は混乱しつつ流されつつ『目立たないように過ごそう!』と決意する。

まったり続けて学園物→恋愛物にできたらなと思っております。

プロローグ

鏡をじっと見る。

ちよつと釣りあがった、大きな二重の瞳がこちらを見返してくる。顔の輪郭はすつきりした卵型で、眉毛は太すぎず細すぎず。すらつと通った鼻筋に、何も塗ってないのにキレイなピンク色の小さい唇。

漆黒でつやつやな髪の毛は、前は眉毛にかかるくらい。横は軽く内に跳ねて頬に少しかかっている。後ろは背中の中間くらいまで伸びており、先つちよを軽く黄色いリボンで結んでいる。

父さんはかわいいかわいいとてもかわいいと、母さんは私に似てほんとうに美人ねえ、私に似てて、などと良く言ってくるので、恐らく可愛くて美人なのだろう。

Yシャツの第一ボタンをとめ、学校指定である一年生用の、緑色で短いネクタイを締める。濃紺で所々金色に縁取りされた襟元が大きく開いたブレザーを羽織る。

厚手の生地の上からでも十分にわかる大きなふくらみを、手でぽふぽふと持ち上げる。はつきり言って大きい。ぶつちやけて言うのと巨乳だ。人を見る分には目の保養で済むのだろうが、自分にくつついているとなるとありていに言って邪魔なだけだ。

腰はやや詩的な表現をすると柳のように細く、お尻は大きすぎず小さすぎずにツンツと持ち上がっている。赤いフレアスカートの先からは、細くすらつとした長い脚。

なんか面倒になってきた。当然ながら肌もきめ細かくて美しいら

しいですよ？要するにかわいくて美人でスタイルも抜群という事らしいのだ。自分ではいまいち自覚できないのだが……。

「行つてきます」

母さんに一声かけて、表に出る。中学卒業を待たずに引越してきた、まだ二ヶ月もたっていないピカピカの新居を出て、テクテクと歩いて登校する。

この春から通っている光泉学院高校までは、住宅街を抜けて商店街へ駅前通りを抜けるまで15分、そこから更に10分弱の、合わせて30分かかる程度。自転車通学が認められている距離ではあるが、慣れないスカートで自転車に乗るという行為がどうにも不安だったので、諦めて徒歩で通っている。

学校に近づくにつれ、同じく登校中の生徒も増えてくる。他の人に目を合わせないで済むよう、目立たないように、うつむき加減になりながら道を進む。別にいじめられている訳ではないデス。間違つてクラスメートに遭遇したりして教室までおしゃべりをする等という事態を避ける為の、自衛の手段なのデス。その他諸々もありまして。

チャイムが鳴りだすキツチリ10分前に正門に到着。生活指導の先生が門の横に立っているが、近隣では名の通った進学校であり周囲の治安も良く生徒のモラルも高い事から、仕事がないと思われりゃ、授業も担当してるから仕事がないというのは言い過ぎか。その先生に軽く会釈をして正門を通過。

今日も何事もなく過ごせますように。変なボロを出さずに済みませよう。目立たず、騒がず、ひっそりと。そうだ、今日は本屋に寄ってから帰ろうかな。と、一限さえ始まっていないのに帰りの事を考えたりしつつ下駄箱を開けると……。

ラブレター

誰かと間違えてたりしてないかな。というか間違いであって欲しいんだがな。

裏返すと、宛名が書いてありましたよ。

『美里 晶』様

様付けとは丁寧デスネ……。美里 晶 ミサト アキラ。うん、オレの名前だ、間違いありません。

せめて女の子からなら……。いや女の子からでもどうしようもないけど。オレも今は女だしな。でも男と付き合う気はないな。元々そんな異性に興味はなかったけど、女になったから男と付き合いますとかがありえない。友達さえ作らなかったのに彼氏とかホントありえない。ありえない……

というか少しくらい噂になってもいいだろ、美里 晶は男に興味は無いつて！オレは入学してしてから何人ふったと思ってる！？ああ、自分でも嫌なセリフだなこれ！俗に言うイヤな女だな！！オレが悪いのか？なにもしてないのに！大人しくしているのに！！うう

うー！！

「……今日は『オレに関わるなオーラ』を120%増しで出して過
しすぎ」

そっつがやいて足取りも重く教室に向かっただった。

プロローグ（後書き）

初投稿なので見苦しい点が多々あると思いますが打たれ弱いチキンなのでご容赦を。

微妙にリアル、微妙にファンタジーで行きたい所存です。

いきなり女なんてありえない

ピピピピッ！ピピピピッ！ピピピピッ！

目覚ましの音で目が覚める。休みの日でも規則正しく！がモットーの母さんの教育の賜物で、春休みとはいえ必ず7時には起きる事になっている。

が、正直つらい。昨日は引越しの片付けで色々遅くまで荷物を上げ下げしたり、すぐ使う物を引き出したりでだいぶ疲れたし。目が覚めたとは言え半分寝てる状態だ。

ピピピピッ！ピピピピッ！ピピピピッ！

うっとうなり声を上げながら目覚ましをストップ。ふあ〜と大あくびをしながら起き上がって腕を伸ばす。ん？なんか黒くてさらさらした物が視界に入るな、髪の毛…？

まあいいや、それにしても眠いから下に行って顔を洗ってこよう。なんか体の変だな？半分寝てるし疲れてるのはわかるけど軽くて重い？訳がわからないと思うけど、自分でもわからない違和感がある。

階段をトントンと降りる。なんか胸の辺りがぼよんぼよん跳ねてるけど何だろう？う〜ん、まあいいか。ふあ〜とまた大あくび。ん？なんか妙に声が高いな。ま、気のせい気のせい……。

洗面所に到着。大きな鏡に広い洗面台。まだ3月になったばかりで水は冷たい。手で触れた時点で、お湯を出すかどうか悩んだが覚悟を決めて、えいっと顔を沈めばしゃしゃと洗う。

ひ〜！死ぬ、死んでしまう〜！などとアホな事を思いながらって何だこの長い髪は。まあいいや、これでバッチリ目が覚めたな。

タオルでごしごしを顔を拭いて鏡を見ると、何か女の子がいた。

たっぷり30秒ほど女の子を眺めた後、まだ目が覚めてないんだな、と判断した。おかしいな、すっきりさっぱりぶるぶるさむさむしたのにな。もっかい顔を洗おう。

冷たい！もう春なのに冷たい！こんなんぜつたい死んでしまおうわゝゝ！などとバカなことを思いながらって髪の毛邪魔だな。まあいや、今度こそ目が覚めたな。で、鏡を見るとやっぱり女の子がいた。

この子おっぱい大きいな、って女の子の胸をじろじろ見ちゃダメだな。鏡の中の女の子も視線が胸に行ってる気がするけど気のせいだ。あれだな、歯を磨くと目が覚める気がする。そうだ、歯を磨こう。

ハブラシとってゝ、歯磨き粉つけてゝ、水をふくんでゝ。怖いので鏡を見ないように俯いて一心不乱に歯を磨く。ごぼごぼごぼ……、ぺっ！お口すつきり。さて、鏡を（略

じーっと見る。右手を上げると左手が上がる。にっこりしてみる。にっこりされた。グーチョキパー。グーチョキパー。うん、アイコだね。

さらにじーっと見る。よおおおおく見ると顔のパーツはオレだ。少し線が細くなってるが15年つきあってきた自分の顔だ。女顔でよくからかわれたりいじめられたりもしたので、恥ずかしながら怖い顔の練習もしたことがある。結論としては怖い顔は無理だったので、表情を消して威圧的な雰囲気を出そうと努力して、こちらはプ

ち成功。オレに関わるなオーラを出せるようになった(つもり)のだ！ってどうでもいい。

髪の毛長いな……、腰まではいかないが背中の中ん中くらいまで伸びてるかな？正直バサバサとつつとおしい。一晩でここまで伸びるなんて何て非常識なんだ。いやそれ以前に……

「……なんで女の子になってるんだよ」

うげっ、声まで高い！高校生にもなるかってのに成長が遅いのか、声変わりもまだか？ってくらいオレの声は高かったのだが、これはマジで女の子の声だ。あっあー、あうあうあう。ダメだ、自分が出してる声だ。

次、胸。おっぱい。でかい。心なしか肩が重い。男の時は、というかつい昨晚までは自分の成長の遅さを気にして悩んでたのに何でこんなに育ってるんだよ！ホントにこれ自分のか？ちよつと触ってみよう。

ふにふに。ふにふに。やわらかいなこれ。ふにふに。ふにふに。触り心地はいいな。ふにふに。ふにふに。うんくすぐったいな。ぐにぐに。ぎゅーっ。いててててっ！

堪能してしまった……。自分のだから興奮するとかは無かったけど。あつたら変態だしな、うん。

次、下。あそこ。あそこっ！？うう、確認したくない。ここまでや

元から女なんてありえない

リビングに親子三人集合中。

ふかふかのソファアの上にあぐらをかいてゆらゆらと落ち着かないオレ。隣にはのほほんと、いつもと変わらない様子でお茶をすすめる母さん。向かいには腕と脚を組んで、目を閉じて深刻な顔をしている父さん。

いきなり息子が娘になってしまったからショックを受けるのは当然だけど、父さんそろそろ何かしゃべってくれないかなあ。当の本人が一番ショックを受けてるんだから。

ああ、でも母さんは落ち着いてたな。ぐしゅぐしゅ泣きながら洗面所にへたり込んでいるオレを見て、冷静に「アキラなの？」と確認をし、大丈夫だから安心しなさいと優しく背中を叩いてくれた。さっぱり要領を得ないであろう、オレの説明を辛抱強く聞いてくれた。

そして父さんと呼んで軽く説明、皆にお茶を出して今に至るといった訳。

ちなみに今日は月曜日。引越し後の手続きの為に休みをとったので父さんも家にいるという訳。同僚の事情により格安で建築中の家を手に入れられるという幸運が舞い込んだのが昨年12月。

それじゃあ受験もこっちの高校で、と合格したのが2月。幸いにしてオレの学力は高く、新居の近くにレベルの高い高校があったのもラッキーだった。アホの子が多い学校だと揉め事も多いし。

会社での手続き関係で3月頭には住んでいたという状況にする為に卒業を待たずに引越す。母さんと二人で卒業式まで残るという選択肢もあったのだが、特に中学の人間関係に思い入れはなかったのでサクリとこちらに来た訳で。まさか目を覚ましたら女になるなんて夢にも思わなかったけど……。

「アキラくん」

うおっ、父さんがしゃべった。銀縁の眼鏡を指でくいつと持ち上げつつ、こちらを見つめている。外資系の結構良い所のサラリーマンである父さんがそういうポーズを取ると、かなりエリートっぽく見えるな。

「いや、アキラちゃんか。僕の大好きなアキラくんが、こんな愛らしいアキラちゃんになってしまっなんて……」

うあっ、父さんきもい。エリート風のクールで知的な顔が、どんだらしくなっている。ロリータ風のシニールで痴的な顔だ。って身の危険を感じる！

「桜花さん、僕本格的についてきたのかな！？アキラくんがアキラちゃんなんだよ！？ああ、もう我慢できない！！」

ガバっとテーブルを乗り越え、抱きしめてきた。ぎゃあああああああ！く、苦しい！きもい！助けて母さん！父さんは男の時からオレに過剰なスキンシップをはかってきたちよつと危ない人だから嫌な予感してたけど案の定このざまだよっ！

「楓さん落ち着いて」

ドゴォー!!と派手に音を立てて父さんがふっとんだ。あれ?母さん今グーで殴った?しかもふっとんだ?

見なかった事にしよう。優しい母さんがグーパンチなんてする訳ないし、父さんも何事も無かったように立ち上がったしな。

「すまない、つい興奮してしまったよ。女の子のアキラちゃんが可愛すぎてついね…」

「あなた、それじゃ男の子のアキラが可愛くなかったように聞こえますよ」

「ああああああああ!そんな事は無い!そんな事は無いですよ!男の子でも女の子でもアキラちゃんは僕の大好きで愛してて人生そのものでうおおおおおおお!!」

ガバツと再度抱きしめてくる痛い苦しいきもい助け

「楓さん同じネタは連続でやっちゃダメでしょう?」

ドガンツ!!と豪快な音と共に父さんが吹き飛んだ。あれ?母さん今のは回し蹴り?ほぼ水平に飛んだ気がする。

気のせいだな。おしとやかな母さんが回し蹴りなんてする訳ないし、父さんも何事も無かったように立ち上がって座ったしな。

……眼鏡が割れているのは気のせいだ。

「アキラが女の子になっちゃったのは良いとして」

「よくないよ！」

「ああ、声もかわいいよアキラちゃんハアハア……」

うあ、父さんマジきもいな……。つていうかオレ一言もしゃべってなかったな。そんなことより身の危険を感じるから母さんに引っ付いていよう。

「あら、甘えん坊ね。で、アキラが女の子になったのは良いとして」

「よくないよ！全然よくないよ！」

「桜花さんに擦り寄る甘えん坊のアキラちゃんもかわいいよかわい
いよハアハア」

「話が進まないから二人とも少し黙りなさい、ね？」

あれ父さんがふつとんでる。何も見えなかったぞ？母さんがやさしく頭を撫でてくる。でもなんか怖い。なんか手のひらから出てるよ！うん、黙っておこう。そうしよう。

「学校とか戸籍はどうしましょう？」

そうだ。当たり前だけど美里 晶は男だ。当然戸籍から住民票から保険証まで男で登録されている。受験の時も当然男だし。実際どうなるんだろう？戸籍がない？存在しない扱い？それ以前に元々の

男だった美里 晶はどうなるんだろう、失踪扱い？父さんと母さんがオレを見捨てる事なんてありえないと思うけど、実際問題どうしようもないのでは？実は性別を間違っつて書類をだしてましたー、で通るような問題でもないだろうし、親戚や顔見知りにはどう説明したらいいんだろう？

なんか気持ち悪くなってきた……。血の気が引き、なんかくらくらする。ふらふらと母さんにもたれかかってしまった。

「だいじょうぶよ、何があっても私達はアキラの事はちゃんと守るから」

「うん、安心しなさい。アキラちゃんは今まで通りで何事もないから、父さんに任せておきなさい」

10分くらいだろうか。二人がやさしく頭を撫で続けてくれたので何とか落ち着けた。父さんもこうしているとまともなものになあ、母さんはやっぱり優しいなあ、でもそろそろ恥ずかしいな……。

「ありがとう、落ち着いた。でも実際どうしよう？」

「そうね、楓さん？」

「役所に忍び込んで書類を改竄するのはどうかな？」

小学生が脊髄反射で答えたようなアイディアが出てきた。あ、なんか涙も出てきた。

「じよ、冗談ですよ！？待ってください、今から真面目に考えるので！」

「楓さん……アキラが大変なのに空気を読まない冗談なんて」

「待ってください桜花さん！？何気にダメージが蓄積してるんです、勘弁して下さい！」

あ、やっぱり痛かったんだ。って気のせいでも見間違いでもなかったのか、母さんが父さんをぶつとばしてたのは……。15年生きてきて初めて知る夫婦の真実。ガクガクブルブル……。

「今日住民票や本籍の変更やらをするつもりだったから書類は手元にあるのですよ、それでも見ながら少し考えます」

そう言っつて父さんが書類をガサガサあさっている。『私も一緒に見て考えます』と母さん。うん、やっぱり無理なんじゃないだろうか。女のオレは養子にしろらうとか？でもそうになると元々のオレは……。うんうん。脚をぶらぶらとふりつつ、取り止めも無い事を考えていると『あれ！？』と二人がすっとんきような声をあげた。ん、どうしたんだろう？

「アキラ、ちょっとこれ見てみなさい」

「どういつ事なんだろうね、ある意味楽でいいんだけど」

なんだろう？二人に手渡された書類を見る。住民票だ。前の住所に家族構成、世帯主、同居している人間の名前、年齢、性別。そこには……

美里 晶 15歳 女

と書かれていた。

ゴスロリドレスなんてありえない(前書き)

サブタイにやや偽りあります。

ゴスロリドレスなんてありえない

性別の欄がある書類におけるオレの性別は、全て『女』になっていた。

「オレ、男だよな？」

「え？立派な女の子ですよ？」

「かわいいわよ、私に似て美人ね」

くそっ、二人そろってポケをかましてくるなんて……。

「男だったよね？間違いなく男だったよね？なんで全てが解決したような顔してるの!？」

「戸籍とか学校の手続きが解決したので、父さん安心しちゃいました」

「安心しないでよ！いきなり女になったんだよ？もっと色々と疑問を持つとっよ!！」

「落ち着きなさい、あとソファアの上で立つのは危ないわよ」

むむ……。確かに自分だけ大騒ぎはみっともないかな。お茶でも飲んで落ち着こう。ズズズ……。ぬるい。

「家族以外で、アキラを知っていた人達に確認してみましよう」

お、流石母さん冷静だな。それは結構いいかも。

「じゃあ父さんに電話して聞いてみますよ」

父さんの父さん、おじいちゃんか。めったに会わないけど可愛がってもらったな。田舎に顔を出すとカブトムシ捕りにつきあってもらったっけ。

「もしもし？オレオレ、オレだけど」

「……切られちゃいました」

父さん死んでくれないかな。あ、母さんがまたゲーで殴ってる。いい気味だ。

「すみません楓です。サーセン、ほんとサーセンしたっ」

なんか若者っぽいしゃべり方してるな。会話の内容まで聞こえないけど、今度は真面目にやってみたいだな。

「ふう、お説教されてしまいました」

「あたりまえだよ、それでおじいちゃんどうだったの？」

「アキラちゃんのラブリーさを説明したら、凄くうらやましがって今度連れて来いと」

「そういうのはいいから」

親指を立てて得意げにしている父さんを、軽くひと睨みする。

「アキラちゃんもお年頃だから、悪い虫がつかないように気を付けるよ」

「……それは要するに？」

「男が付きまよってきたら殴れと。もちろん、と答えておきましたよー」

「答えになってないよ！まあ理解できたからいいや。おじいちゃんの中では、オレは元から女の子って事が……」

まだ断定できないけど家族以外ではオレは元から女の子と認識されてる？自分でも確認したいけど友達いないしなあ……。仮にいても、こんな変な事を説明するのは難しいし。

「私もかけてみるわね」

お、母さんも確認してくれるのか。父さんと違って安心できるな。

「もしもお母さん？久しぶり。今少し大丈夫かしら？大した事で

はないのだけど……」

「うん、うん……。それで私が高校の時に、若気の至りで買ったゴスロリドレス……」

「アキラがどうしても着たいって言うの。着払いで良いから送ってくれないかしら」

全然安心できなかった。

若気の至りってなに！？ゴスロリ！？そんなもの絶対着たくないよ！！それ以前に母さんの高校時代にゴスロリとかあったっけ？

「すぐ送ってくれるそうよ、良かったわねアキラ」

「全然よくないよ……」

「そんなに照れないでも。可愛い服を着たがるのは女の子として当然よ？」

「なんの話だよ……あと女の子じゃないよ……」

こんなに短時間で大声を出しまくるのは久々だよ、小学生以来じゃないかな……。二人そろって微妙にボケたおしてくれるので、非常に精神的に疲れた。

それともあれだろうか。父さんも母さんも実はショックで色々と混乱してるのだろうか？

「それはさておきね」

「他にもお古を色々送ると言ってたから。おばあちゃんもアキラの事は、元から女の子だったと思ってるみたいね」

「送らなくていい、と言っておいて」

「何言ってるの？せつかくだし、着られそうな物は全部送ってもらわよ」

「なんで女物を着なくちゃいけないのさ!!」

「女だからよ」

身も蓋もないな。しかしおばあちゃんの中でも、オレは元から女の子という認識らしいから、どうやら家族以外は全てそういう事っばいなあ。

ご都合主義というか、なんとというか誰かの都合のよい風になっているというか……。少なくとも自分は女になりたいなんて思った事はない。犯人は父さんか？ありえそうだ！

その後二人で、オレを知っている親戚や知り合いに同じような電話をかけまくった。細かい所は略すが、オレは生まれた時から女の子でFAがでた。なんかどうでもよくなってきたな。あ、涙が……。

「アキラ、ゴスロリドレスは絶対に着てもらわよ、あと他の服も」

「なんで!?!」

「娘を着せ替え人形にして遊ぶのは、母の特権だからよ」

「はい！はい！僕はそれを撮影したいと思います！是非とも撮影させて下さい！」

着せ替え人形にして遊ぶってなに？母さんの顔がマジなだけに怖い……。ちなみに父さんは土下座をお願いしていた。

ウォシュレットなんてありえない(前書き)

トイレで丸々一話なんてありえないですね、短いんですけど。
ソフトにしたつもりですが、生々しい描写もありますので「注意を」。

ウォシュレットなんてありえない

腹が減ってはなんとやらで、朝ご飯なう。

色々あったので朝食というよりブランチな時間だが。

ブランチといっても、うちは朝は基本的に和風。ご飯に味噌汁に納豆に卵に焼き魚におひたし。うまいです。

微妙に現実逃避を始めてるのは自覚している。

「じゃあ父さんは役所に行ってきます、すぐ戻るからね！」

抱きついてきた。現実に戻された。だから苦しいって、おっぱいつぶれる！

『食事中に危ないでしょ』と母さんの右フックが、父さんのテンプレートに炸裂した。そっちの方が危ないと思うけどなあ……。

食後はポーツとテレビを見る。月曜の昼間は面白い番組はやってないな。テレビ自体あまり見ない方だけど。現実逃避、現実逃避。

「アキラ、いつまでパジャマでいるの？いい加減に着替えてきなさい」

現実逃避を邪魔された。

着替えなんかよりもっと切実な問題を、一生懸命忘れようとしてたのに。正確には我慢してたのに、だが。

トイレに行きたい。

実は結構前から限界に近かったが、男として、思春期の男子として、行つていいやら悪いやらで、ひたすら我慢していたのだ。あるべき物が無いからか、男の時より我慢がきかない気がする。しかし……しかしもう限界だ！母さんに相談しよう。

「……トイレいきたい」

「……いつてきなさい」

顔を真っ赤にしてトイレいきたいと母親に訴える15歳男（笑）
どうしてこうなったんだろう。やば、また涙が……。

「……」

「ついでにいつてほしいの？」

「そんな訳あるかー！」

「じゃあ行つてきなさい、ちゃんと座つてするのよ」

「で、でもさあ……。その……あの……」

「自分の体だし、すぐ慣れるでしょ。漏らしたら写真とるわよ」

「いつてきますー！」

母さん容赦ないな！回れ右してトイレにダッシュ。『終わったら

ビデを使うのよ、清潔で気持ちいいから』と母さん。はいはい、ビデね！

ボタン！とトイレに駆け込む。えつと便座をおろしてと。見なければ問題ないな、問題ない。ズボンとトランクスをさっと下ろして腰かける。急げ！結構やばい！

「はあああ……。危なかった……。はふうっ」

我慢しすぎたせいか、中々止まらない。やばかったなーホント。この年で漏らしてたら自殺物だったな。しかも写真。がくがくぶるぶる。

うっ！？なんかおしっこが、口には出せない所を垂れていく感触が！？なまあつたかくて気色悪いな。えーっ、と、ビデだっけ？

右手にあるウォシュレットの操作パネルを見る。このボタンか。お湯が出てアソコをきれいにするんだな。よし、押しぞ。押しちやうぞ……。ポチッと。

「ひああああああああああ！！」

オレはトイレで絶叫した。慌ててボタンをもう一回押し解除。ウ、ウォシュレットのくせにびびらせやがってえ……。！

ついでに自分のも見ってしまった。なんだ思ったよりショックは受けないな。細かい描写は割愛させてもらうが、なめらかな曲線で、

きれいな気がする。変な気持ちにはならない。

「自分の体だし、そういう物と思えばなんとかなるかなー」

もう少し観察して調べてみたい気もしないでもないけど、やめておこう。うん、どうでもいい。やめやめ。もっかいウォシュレットにチャレンジだ、清潔にしないとな！

「んっ……これいいな、気持ちいい……」

結論としてウォシュレットは神だな。外人さんが感動してブログに書く気持ちがあったよ、クセになりそうだ。えーっと、あとはティッシュで拭いてと……。

何も無いってのは（正確にはあるが）やはり寂しいな。よしっ、完了！一人でトイレできたYO！

あ、また涙でできた。オレ今日何回泣いてるんだろ……。

リビングにいったら掃除をしている母さんが『気持ちよかった？』と言ってニヤリとした。

近くにあったティッシュの箱を投げつけたら、箒で打ち返された。

もういいや着替えにいこ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8949z/>

美少女なんてありえない

2011年12月29日14時47分発行